

2005年 1月 11日

人間科学研究科長 殿

## 山田雅子氏 博士学位申請論文審査報告書

山田雅子氏の学位申請論文を下記の審査委員会は、人間科学研究科の委嘱を受け審査をしてきましたが、2004年12月8日に審査を終了しましたので、ここにその結果をご報告します。

### 記

1. 申請者氏名 山田雅子

2. 論文題名

顔の性別認知における肌色の作用 ~ 日本人大学生の男女合成顔を用いて ~

3. 本文

本学位論文は、肌の色が持つジェンダーステレオタイプに着目し、顔の性別認知における肌の色の作用に迫るものである。このテーマを認知科学的に追求するため、本論文では7つの実験調査を行っている。論文の構成を成す各章の概要は次の通りである。

序章 顔の性別認知とその背景として注目すべき肌色のジェンダーステレオタイプに言及し、顔認知、肌、ジェンダーに関する諸事象を紹介している。

第一章 ここでは線画、合成顔画像を用い、性別判断及び性別の印象評定に対する肌色のステレオタイプの作用を確認している。その結果、色黒肌は男性的印象を、色白肌は女性的印象を強める傾向が認められた。

第二章 この章では、合成顔画像を用い、性別判断に及ぼす肌色のステレオタイプの作用を再確認している。またここでは、アンケートにより肌色に対するジェンダーステレオタイプが根強く存在することも捉えられた。

第三章 合成顔画像を用いた対比較法実験により、色白肌はより女性的に、色黒肌はより女性的でない方向に印象を導く傾向を確認した。また、このような肌色の作用には形態的な曖昧性が要件となることも示唆された。

第四章 ここでは合成顔画像に対する種々の評定、判断を行わせた結果、観察時間の短縮により肌色のステレオタイプにより強く依拠した判断、評定が行われる傾向が得られた。

第五章 この章では顔の性別認知における肌色の作用、顔の性別認知のメカニズム、顔認知から眺めるジェンダーの構造の3項目に亘って全実験結果を総合的に検討している。

第六章 最終章では、本研究の結論として肌色がステレオタイプの及ぼす影響の強さやその作用における条件を指摘し、今後の展望としてより広く人間科学的に本テーマにアプローチする必要性について言及している。

論文中では次の三点を目的として掲げているが、それらに関して上述の各章における実験調査の結果からまとめると以下が指摘できる。

#### (1) 顔の性別認知における肌色の影響の解明

肌色は性別判断、性別の印象にステレオタイプの影響を及ぼした。当該の影響には顔の形態的な条件が付随し、そうした形態的な条件は課題によって異なることも明らかとなった。

性別判断では物理的特性として男女のパターンが拮抗する合成顔において肌色の作用が顕著となった。この場合には同じ顔形態であっても色黒肌において男性判断が上昇し、色白肌において特に女性判断に傾くといえた。また、顔の観察時間が著しく短い場合には肌色による判断の差異が顕著に見られたことから、形態に基づく判断が困難な場合において特に肌色の作用が強まると考えられた。

一方の性別の印象評定では、男女どちらかのパターンが明確に優勢となる形態において肌色による印象変化が生じ易い可能性が得られ、更に男性的形態ではより色黒に、女性的形態ではより色白に見られるという逆方向の作用も抽出された。

#### (2) 顔の性別認知のメカニズムにおける肌色の導入

前項のような肌色の作用条件の違いは性別判断と印象評定の処理の独立性を示唆する。これまで低空間周波数成分の情報のみでも顔の性別判断は可能であると報告されているが、全体的な布置情報を利用してまず大まかなカテゴリ分けがなされ、この段階で明確な分類が不可能であった場合に肌色のステレオタイプが参照されることも推測された。総じて、肌色は性別判断に対して補助的に機能する一方、印象においては構成要素の一つとなっていることが考えられた。

また、判断された性別によってジェンダースキーマが活性化する可能性についても指摘された。

男女の顔の合成比率を操作した実験では、一方の顔パターンが3/4以上含まれていれば性別判断が安定することが確認され、これ以上に片方の比率が高まった場合、性別の印象の変化は過小視される傾向が見られた。こうした傾向より、物理的に規定される情報がそのまま心理的な評定に反映されるのではなく、より効率良く安定的に性別を判断するために調整されていることが推察された。

#### (3) 認知傾向に基づくジェンダーの再考

前述の認知傾向を支える要因として視覚的に経験された情報の蓄積を想定した場合、摂取される視覚像として第一に挙げられるのは実際の男女の肌色である。本研究では、アンケート、実測結果共、男性はより色黒、女性はより色白という傾向を示した。また、好ましい肌色は男女で明らかに異なり、女性に対して色白肌を求め

る意見が特に多く抽出された。女性の肌色は印刷物において赤み寄りかつ高明度で再現されているという報告があるが、好ましいとされる肌色にまず性差があり、その社会的通念を強化するかたちでメディアによる視覚像の提供がなされ、更にその像が模倣されることによって一層の強化、定着がもたらされることが推測された。

性別認知は、当然のことながら顔のみならず骨格やしぐさ等、複雑な要素が絡みあい統合的に生じるものと考えられるが、本論文は性別認知における肌の色の重要性に着目し、種々の実験調査を行ってきた。その結果、肌の色は性別の認知に深く関与し、その作用の方向性は従来のステレオタイプである「女性は色白、男性は色黒」という概念と社会通念をなぞるものであることが把握された。しかしそのようにステレオタイプ化された概念を、従来、全く存在しなかった男女の合成顔を使用するといった手法を用いて認知科学的に明らかにしようとしたところに本研究のユニークさとオリジナリティがあると考えられる。すなわち、肌の色の影響は単に嗜好・評価という段階ではなく、性別の認知というレベルにまで及んでいる可能性を指摘し、この着想を独自の手法で極めて丁寧に明らかにし、非常に示唆に富む結論を得たという事こそが本研究の優れた点である。本論文はそのような意味で高く評価できるものとする。

以上の事から、審査委員会は山田雅子氏の申請論文が博士学位を授与するにふさわしいものであると判断したことを報告する。

以 上

山田雅子氏 博士学位申請論文審査委員会

主任審査員 早稲田大学教授 博士(人間科学)(早稲田大学) 齋藤美穂 印

審査員 早稲田大学教授 文学博士(東京大学) 中島義明 印

審査員 早稲田大学教授 博士(人間科学)(早稲田大学) 野嶋栄一郎 印